

日光研究プロジェクト2012

主 催：国際学部附属多文化公共圏センター

後 援：日光市 日光市国際交流協会 日光地区観光協会連合会 日光ユネスコ協会

所属・職・氏名：国際学部附属多文化公共圏センター長 国際学部教授 高際 澄雄

本研究プロジェクトは、平成17年度に実施された宇都宮大学地域貢献事業「日光の明治大正期における国際化の諸相に関する調査と国際交流の振興」からの連続である。この間大学の法人化により実施方法が変わったため、しばらく対応できなかったが、国際学部附属多文化公共圏センターを通じることで実施可能になったものである。

研究プロジェクトの目的・意義

平成17年度の講演会においては、桃山学院大学教授（当時）松永俊男氏を招き、日光交流促進センターにおいて、「ヨーロッパにおける博物学——日光国際化の原点を探る」と題して、ヨーロッパで博物学がどのような役割を果たしたか、そしてその博物学が日光の近代化にどのように作用したかをお話し頂いた。松永氏の詳細な講演をまとめると、博物学はヨーロッパの自然研究から発達したもので、とくに18世紀に貴族や富裕層に愛好され、隆盛するが、やがて生物学、歴史学、人類学、地学などの科学に発展していき、19世紀中葉のダーウィンの『種の起源』の出版でその頂点に達する。ダーウィンは、それまでの博物学の最新成果に立って、1831年から1836年まで、ビーグル号による航海で世界各地の動植物の観察採集をする機会を得るが、その結果として生物の進化の考えに辿りつき、現在の生物種は、長い進化の過程によって現われたという、画期的な進化論を発表した。

このダーウィンの優れた成果が公表された時期にロンドン大学で学んでいたのがアーネスト・サトウである。彼は外交官として日本に赴任し、日本の近代化に貢献するが、日光の自然に惹かれ、その自然の豊かさを外国人に紹介することで、やがて日光がサトウの息子武田久吉を通じて日本の植物研究の拠点の一つとなっていく、このように

話された。

つづいて、日光のアーネスト・サトウの活動について研究をされている尾田啓一氏から話をしていただいたが、時間の制限で十分にお話しいただけなかった。

翌日のスタディー・ツアーでは、日光金谷ホテルのご厚意で、現在の金谷ホテルの出发点であり、イザベラ・バードも宿泊した金谷カッテージイン、外国人居住者や旅行者の礼拝場所となった日光真光協会、現天皇の疎開先となった田母沢御用邸、近代における植物研究の先駆けの拠点となった日光植物園、グラント将軍など外国人訪問者を受け入れて日光国際化に大きな役割を果たした輪王寺を訪れ、関係者からお話しを頂いた。前日の講演で話された場所を実際に見ることで、講演内容が現実化し、日本の植物学の発展と国際化の進展における近代日光の重要さが理解できた、と好評であった。

本研究プロジェクトは、この事業の成果を受けて企画されたものであり、シンポジウムとスタディー・ツアーから構成されている。

1. シンポジウム「自然美と自然保護運動の近代日光—文学者、自然保護主義者、アジア人旅行者の記録から読み解く」

平成24年9月8日(土)13:30-16:30

於日光市中央公民館（日光市からの無料貸与）

2. スタディー・ツアー「自然美と自然保護の近代日光」 平成24年9月9日(日)9:30-16:30
（バスは日光市の提供）

そしてその目的と意義は以下の通りである。

1. シンポジウムの目的と意義

- (1) 外国人居住者や訪問者によって触発された生物学、とくに植物学研究が日光の自然保護運動にどのように影響したかを明らかにして、今後

の日光の発展につなげていく。

- (2) 外国人訪問者によって認識された日光の自然美が日本人にどのように再認識され、文学の発展に貢献したかを明らかにし、これからの日光の在り方を考える助けとする。
- (3) 主として欧米の居住者や旅行者に認識された日光の自然美は、アジア人旅行者にはどのように捉えられたのかを明らかにして、これから増加すると思われるアジア人旅行者に対する日光観光の振興の一助とする。

2. スタディー・ツアーの目的と意義

- (1) 前日のシンポジウムで話題となった場所を実際に訪れて、認識を深める。
- (2) 日光の新しい美しさを発見して、日光観光の振興の一助とする。

研究プロジェクトの実施方法

1. シンポジウムの構成

本シンポジウムは、講演とパネルディスカッションにより構成されている。講演の演題と講師は以下の通りである。

- (1) 「日光から見た自然・文化の保護運動—自然保護から環境保全へ」
講師 尾田 啓一氏（元宇都宮大学講師）
- (2) 「子規と近代俳句にとっての日光」
講師 松井 貴子氏（国際学部教授）
- (3) 朝鮮人旅行者が見た日光—もう一つの美の発見の旅」
講師 丁 貴連氏（国際学部教授）

研究プロジェクトの実施結果

1. シンポジウムの実施結果

3人の講師による講演とその後のパネルディスカッションによって、以下のような実施結果を得ることができた。以下に詳しく述べることとする。

- (1) 講演「日光から見た自然・文化の保護運動—自然保護から環境保全へ」 講師 尾田 啓一氏



尾田氏は、日光の自然環境および歴史的な特性についての説明から講演に入った。日光の災害の多さ、湿潤な気候、そして歴史的な変化が、明治期に入って、文化財保護運動と自然環境保護運動を引き起こしたという。

明治期に日光を再発見した人々は、アーネスト・サトウや、イザベラ・バードなどの欧米人であったが、やがて、日本人の中にも、そのような人々が生まれてくる。

① 日光山社寺保存運動「保晃会」

明治元年の神仏分離令により、神社と寺院の分離が実施され、神社内の仏堂は神社外に移さなければならなくなって、日光の荒廃が進んだ。明治12年グラント将軍に同行して来晃した内務卿伊藤博文に日光山社寺保存を訴えたが、政府の援助は得られなかった。そこで、安生順四郎ら県内の名望家を中心となり、出資を呼びかけて寄金を積み立て、民間結社「保晃会」を結成し、当時の東照宮宮司で元会津藩主松平容保が会長として発足し、活動した結果、明治30年「古社寺保存法」が制定され、政府が文化財保存にあたることとなった。大正7年、目的を達成した保晃会は解散した。保晃会の思想と活動は、文化財保護の日本における先駆的活動であった。第3代会長勝海舟の文撰揮号になる大きな「保晃会碑」が東照宮宝物館の南にある。

② 欧米人の学術調査・登山・観光

日光には、サトウの他、イギリス公使パークス、画家ワーグマン、アメリカの博物学者モース、女性旅行家バードが日光を訪れ、その自然の豊かさを讃えた。

③ 国内研究者の学術調査・登山

こうした欧米の人々の日光の自然評価に呼応するように、国内研究者が日光の植物調査を行うようになった。矢田部良吉、牧野富太郎、南方熊楠、松村任三、三好孝（コウシンソウ発見）、志村寛、関本平八などが、日光の植物調査を精力的に行った。

④ 自然保護に関わる動き

五百城文哉は、茨城から日光に来たが、やがて日光に居住し、ロックガーデンをつくって細密植物画を描くようになり、イギリスで高い評価を得た。彼は城数馬、小杉放庵と知り合い、登山植物採集を行うようになる。城数馬は日光登山を頻繁に行ったが、この活動に大きな影響を受けたのが、サトウの息子、武田久吉であった。

⑤ 日光植物園

明治34年、東大総長山川健次郎は、大学植物園の日光分園設置を計画、中山信徴（日光宮司）、松村任三、五百城文哉、城数馬がその計画を受けて、設置を進めた。明治35年、平地から高山までの多様な植物が分布する日光で、中部日本の代表的植生を示すために、山内仏岩の2,600坪に開園された。しかしたびたびの稲荷川の出水により、堤防が破壊されたため、明治42年、花石町に20,000坪に拡張移転された。

⑥ 日本山岳会

明治33年、市川三喜を中心に日本博物学同志会が結成された。この同志会は山岳までの植物採集を行った。

明治38年、日本博物学同志会の支会として「山

岳会」が創設され、会員は城数馬、武田久吉など7名であった。宣教師ウェストンがイギリスに倣って山岳会の設立を勧めたという。会報「山岳」第2号には、志賀重昂、第3号には白井光太郎が寄稿している。

⑦ 鉱害の発生と自然保護運動

明治20年ころから、足尾銅山の鉱毒問題が深刻化し、田中正造が渡良瀬川下流被害民救済のために、鉱業停止運動を強力に進めた。また西沢金山でも同様の鉱害が起こった。

さらに尾瀬においては、その水を利用して水力発電を行う計画が作成された。かねて豊かな尾瀬の自然に魅せられていた武田久吉は、昭和3年のアセスメントにおいて、尾瀬沼発電計画は「尾瀬沼の風致に及ぼす影響は重大、学術上貴重な風景植生を破壊する、発電量はわずかである。国家的至宝を損なうべきでない」と答申した。平野長蔵、長英、長靖3代の活動と相まって、尾瀬の自然は守られた。

⑧ 「史跡名勝天然記念物保存協会」と国立公園化

白井光太郎は天然記念物保護・保存の必要性を訴え、明治39年、「史跡名勝天然記念物保存協会」を設立した。大正4年第2回講演会が日光で開催され、日光の自然的、文化的価値が優れた講演者によって論じられた。

また明治44年、日光町長西山真平は、日光の国立塩化を請願し、昭和9年に国立公園指定が行われた。

⑨ 太郎杉訴訟

日光の交通障害から、神橋付近の杉の伐採・道路拡張案が提出された。これに対し、東照宮青木仁蔵宮司は土地収用阻止のための行政訴訟を提訴、全国の支援を受けて、勝訴した。この自然保護運動の意義は、自然保護の原則が確認された点において、きわめて大きいと言える。

⑩ 自然保護運動の成果

日光においては、平成11年に日光の社寺が世界文化遺産に登録され、平成17年に奥日光の湿原がラムサール条約湿地として登録、さらに平成24年に渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地として登録された。

豊かな日光の自然を保護・保全していくためには、先人たちに努力を深く理解することが必要である。

(2) 講演「子規と近代俳句についての日光」

講師 松井 貴子氏



① 子規の最初の日光への旅

近代俳句の確立者、正岡子規は、日光を2回訪れている。

最初の旅は、明治19年に行われた。旧藩主の息子久松定靖のお伴として訪れ、洋服代10円、支度金5円、旅費も日当も旧藩主の息子持ちという贅沢な旅であった。あいにく雨不足で華嚴の滝の水が流れ落ちていなかったが、中禅寺湖の湖畔の静けさに忘我の境地を味わった。このため、日光の旅は子規にとって忘れられない旅となった。

② 子規の日光再訪

明治25年、子規は自らのために日光への旅を行った。この時は日光の紅葉を見るのが目的であり、また前回見られなかった華嚴の滝の見物も目指していた。

幸い華嚴の滝は壮観を呈していて、子規はしば

らく俳句をつくることができなかったという。中禅寺湖はこのときは紅葉が美しく、湖水よりも紅葉に目を奪われた。子規はこの旅で、のちの写生につながる環境認識を示している、と松井氏はいう。

③ 子規が考えた日光写真帖

子規は日光の写真を所蔵していて、写された風景を文章で詳細に描写している。位置関係の明示にこだわりを持つ子規は、いくつかの写真を組み合わせることで、自分を取り巻く空間を様々な角度からとらえることもできると思いつき、写真帖で何枚もの写真を連ねる工夫をしたのだと考えられる。

病床にあって、多くの場所を訪れることができなかった子規は、こうした工夫によって、個人の経験を他者と共有することができることに気付いた。これが子規が考えた近代写生の極意の一つであった。

④ 日光を詠んだ俳人たち——子規以前と子規以後、芭蕉と近代俳人

芭蕉が日光を訪れた際詠んだ俳句は有名であるが、これには当時の俳句の創作理念が影響している。つまり日光への挨拶句として、日光を見ずに造られた句を本にして、実感を加えて作られた。江戸時代の多くの俳句がこのような方法で作られたのである。

しかし、子規は自分の感動を読者に伝えるために、風景描写に自己の主観を強く重ね合わせ、内面を強く表出することを主眼とするものである。

滝みだれ大残雪にひゞき落つ

青葉闇鐘つく男のけぞりて

これらのような、新しい発見のある句が近代俳句の特徴であり、このような近代俳句によって、日光の自然美は、それが詠まれた句の数だけの多様性をもって、現前し、保持継承されていくであろう。そして、これからも、新たに日光の句が詠まれる度に、新たな日光の自然美が生まれていく

のである。

(3) 講演「朝鮮人旅行者が見た日光—もう一つの美の発見の旅」 講師 丁 貴連氏



避暑地として、日光と比較されるのが軽井沢である。イメージの良さでは、軽井沢が日光より評価が高いが、歴史的に見れば日光には古代から蓄積された観光資源があり、まだ十分に認識されていない。すでに江戸時代に朝鮮通信使が3回日光を訪れており、日光の自然の美しさと東照宮の豪華さを讃える漢詩を残している。こうしたことは比較的知られているが、明治期に入って朝鮮人旅行者が日光を讃えたことは余り知られていない。

① 在日留學生が見た日光

日朝修好条規以来、日本の影響力が増大した朝鮮では、近代化を進めるために、日本から学ぼうと、留学生を送ることとなった。最初の留学生として、1887年に3人が送られたが、日韓併合直後の1909年には886名の朝鮮人留學生が日本で学んでいた。留學生たちは、勉学をする傍ら反日運動を行っていったが、大韓留學生会を組織して、機関誌『大韓興學報』を発行した。その第3号から第5号に、日光見聞録が「觀日光山記」として掲載されている。これは単に日光の印象をつづった紀行文ではなく、日光の歴史から文化、自然、産物などを論じた本格的な日光論であった。著者である尹定夏は、日光は歴史的・文化的・社会的に優れた遺産をもつだけでなく、自然環境に優れた土地でもあると論じた。このため、やがて修学旅

行団が日光を訪れるようになる。

② 修学旅行団が見た日光

韓国では1900年代に修学旅行が行われるようになったが、1920年代には日本や満州まで行くようになった。日本では、釜山を経て下関に行き、関西（京都、大阪、奈良、伊勢）、関東（東京、横浜）を見るという旅行が多かったが、日光を目的地にする学校もあった。そうした日光を訪れた修学旅行団には、日光が人気であった。理由は、日光通信使と同じく、杉の大木の立ち並ぶ杉並木と、豪華絢爛たる彫刻に覆われた東照宮の華やかさにあった。

③ 「内地視察団」が見た日光

農業や工業の振興を目的として、企業家や官僚を中心に組織された「内地視察団」が、日本の鉄工所、造幣局、セメント工場、紡績工場などの視察を行ったが、その視察の中に日光も含まれていた。

この視察によって、それまで朝鮮人が持っていた日本文化観、すなわち日本文化は遅れているという考えが変わり、日本文化を評価するようになった。そうした転換に力があつたのが、日光の建築物である。江戸時代からこうした文物が作られ、守られている様子を見て、日本人が文化の維持に努力をしてきたと考えられるようになったのである。

④ 朝鮮人の日光観

ドイツ人建築家ブルーノ・タウトは『日本美の再発見』の中で、伊勢神宮や桂離宮の簡素な美しさを称揚し、これらを日本美の神髄であり、東照宮建築に見られる豪華な装飾は「將軍趣味」で醜悪であると貶した。しかし朝鮮人旅行者には、伊勢神宮や桂離宮は平凡に映つたのである。朝鮮では儒教文化、特に朱子学が強い影響力をもち、質素で簡素な建物が好まれたために、伊勢神宮や桂離宮はそれほど新鮮には見えなかった。ところが、

豪華絢爛たる彫刻に彩られ、豊かな自然に囲まれた日光の建築群は、新たな美しさとして朝鮮人旅行者の心をとらえたのである。

(4) パネルディスカッション



パネルディスカッションは、高際センター長が司会をし、3人の講師と20人のフロアーの討議によって行われた。

ここで明らかにされたことは、日光が日本の自然保護運動発祥の地であることが、その多岐にわたる人々の活動から明らかであること。子規の日光旅行はその服装からしても、芭蕉を意識しており、やがてそれが、近代俳句の確立に至ったこと。朝鮮人旅行者の日光認識は、ブルーノ・タウトの日光建築批判を超える視座を提示するものであること、などである。

まとめとして、日光はサトウやバード、グラバーなどイギリス人の目にとまったことで近代化が始まったが、それは湖水地方が詩人ワーズワースの提唱で自然保護運動発祥の地となったことと関係するものと思われる。日光は湖水地方の自然とよく似ている。これから日光の自然は、この観点からも調査が行われ、さらに市民の側から発展が期待されるべきではないか、と指摘された。

2. スタディー・ツアーの実施結果

9月9日(日)9時30分に日光中央公民館に集合し、日光市提供のバスで出発した。9時40分に第2集合地のJR日光駅に寄って、最初の駐車場輪王寺から、徒歩で山内を歩き、途中芭蕉が宿泊した養

源院跡を見物して、仏岩の開山堂に着いた。ここで尾田氏から開山堂、仏岩、日光植物園跡地の説明を受け、見学をした。



その後参加者イーストマン真理子氏のご好意で、ご自宅を見学した。イーストマン邸は、イタリア大使館別荘を設計したレイモンドの設計になる。庭園は緑豊かな苔で覆われ、また簡素ながら工夫のされた室内に参加者一同、山内での生活の豊かさを味わった。

さらにイーストマン氏の案内で、通称「赤門」と呼ばれる外国人用の邸宅を見学した。現在も使われているこの邸宅は、古い様式を残し、伝統的建築を壊し続けている今の日本の在り方に反省を迫った。

ここから、東照宮宝物館庭園まで歩き保晃会の碑を見物した。ここで尾田氏から、巨大な石碑の成り立ちについて説明を受けた。



12時に日光中央体育館駐車場に移動して、浄光寺まで歩いた。この寺は、日光の古い歴史を刻んでいるが、サトウの息子武田久吉が眠る場所でもあり、お参りして自然探究に尽力した人の功績を偲んだ。



13時に日光中央体育館駐車場を発って、中禅寺前駐車場に13時30分に到着。ここで各自昼食をとり、14時に集合して、中禅寺湖畔の遊歩道を歩き、英国大使館別荘、およびイタリア大使館別荘を見学した。



ここでも尾田氏が説明され、おそらくサトウの別荘が英国大使館別荘となったであろうとのお考えを述べられた。イタリア大使館では、記念の集合写真を撮り、30分ほど自由見学をした後、バスに戻った。二つの大使館別荘のある砥沢は、静寂が支配しており、欧米の人々が日光の自然を高く評価した理由が感覚として理解できる。



中禅寺前駐車場を15時30分に発って、16時J R日光駅に着き、16時15分に日光中央公民館に戻った。

天候に恵まれ、日光の自然と文化の豊かさを味わうことのできたよいツアーとなった。

研究プロジェクトの成果

シンポジウムとスタディー・ツアーを通じて、近代日光における自然がいかに重要な役割を果たしたかが実感として理解できた。

この研究プロジェクトの詳細は報告書を作成したので、日光市や後援団体および市民に活用いただき、日光市のこれからの発展に役立てていただきたい。

（その後、日光植物園の柴田様から、最初の日光植物園開設地は仏岩近くではなく、現在の日光山内東照宮馬場付近であった、とのご指摘をいただきました。付して、感謝申し上げます。）